

二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版

ホワイトプリズンV

湿潤なる蜜林に碧の蝶は舞う

小説 黄 支 亮

挿絵 松沢 慧

序章

月影にて

006

第一章

南海へ

012

第二章

薰り高い遊戯

060

第三章

蛇と碧の蝶

128

第四章

恥辱の実

193

登場人物紹介

Characters



フィオ

今は亡き母親の再婚に伴って、クレイホーン男爵の義理の息子となった少年。

ポーラ

フィオとは血の繋がらない叔母。性に対しては奔放な意識を持つ女性。栗色の長い髪を後ろでひっつめている。

リディア

フィオの幼なじみで騎士見習いの少女。茶色い髪を肩まで伸ばしている。

マレーネ

クレイホーン男爵によってさらわれてきた、西方辺境伯の息女。黒い髪の美女。

ニーナ

かつての聖王国聖母騎士団の団長。硬くて癖のある赤髪を、少年のように短く刈り込んでいる女丈夫。

サラ

かつての聖王国聖教団の神官長。柔和な面立ちをした、金髪の美女。

シルビア

かつての王立魔法学校の校長。腰まで伸ばした黒髪を、頭の後ろのところで無造作にまとめている。

エマ

かつての聖王国の女王。黒い髪を顎のラインで切りそろえている。

真つ白い液体が固まりのようになってこぼれてくる。半分は少年の放つた精液であるが、もう半分は美女の胎内に溜まった破廉恥な膿うみであった。半透明の少年の白とねっとりとした濃厚なマレーネの白。溶け合う二つの白い体液はマレーネの膣からだらだらとこぼれ落ち、肛門を濡らしてついには白い砂浜の上に垂れ流れていった。

「よし……」

フィオは自分の成果に十分に満足をした。少年はすでに外野の視線を気にしていないし評価についても同じである。少年にあるのはただ目の前で激しい飢えに苦しむ妻を救わなければという使命感だけであった。

「次は……」

ぐったりとなっているマレーネを砂浜に寝かせたまま少年は残る二人の女のどちらの膣に薬液を注ぐかを検討する。豊かな肉体を誇る若い叔母と、発育途上にある幼なじみの美少女。うまい肉料理を前に少年は僅かに迷いを見せた。そして、その迷いに、供された肉の一つが反応した。

「さ、早く……」

ポーラは甥の前で用を足すような姿で股間を剥き出しにしたまま膝を左右にかつと割ってしゃがんだ。そして恥知らずな姿のまま獣のようにフィオのペニスを軽く握った。放精を終え、だらりと垂れ下がり、純白の体液で綺麗に輝く少年の衝角を女は右手で優しくさ

すり始める。若者の欲望はポーラの愛撫に見事に応え、驚くべき回復力で再び屹立する。美女は愛液で濡れた肉鉗に祝福するように口づけをし、ためらいなくこれを口に含んだ。

ちゅ、ちゅうう……。

舌で先端を舐め、竿を舌と喉で包み込むようにしてしごき、横笛を吹くようにして唇を走らせ、ペニスの甘美な味わいを堪能する。ポーラの様子にまるで魅せられたようにリディアも動き始める。少女はポーラの背後に回るとしゃがみ込んでいる熟れた美女の股の間に砂だらけになることもいとわずに自らの頭を仰向けに滑り込ませる。そしてそのままポーラの溶けてどろどろになっている肉のびらびらに舌を入れ始める。

ぴちやぴちや……。

フィオのペニスへのポーラの奉仕。ポーラの熱く濡れた腔肉へのリディアの刺激。上手な高め合いを見る外野の女たちは自慰を楽しみながら、感心したように声を上げる。

——ああ、なんて気持ちよさそうなの……。

——まるで一つの身体のようにお互いを刺激し合っているわ……。

言葉を交わすこともなく、相手の心の動きを無意識に感じ取り快感の壺を刺激し合う。フィオたちにとっては当然の行為である。

ぴちやぴちや……。

リディアがポーラの不細工な肉貝を指で剥き、汚れた局所の筋肉を大開きにして、その



うえで感じる一点を小さな舌でほじくり返す。痛烈な刺激をもらってポーラは一瞬、フィオへの奉仕を忘れてしまう。

「ああ、そこは、そこは……」

極度に興奮しているポーラのイソギンチャクを中心からはすでにねっとり糸を引くコンデンスミルクのような体液がじわわっと染み出している、リディアは酔いしれたように濃厚なエキスを舌ですする。

「ああ、穴の中に舌を入れては駄目……」

ポーラは苦悩して言い、そしてリディアはポーラの哀願を聞かずに美女の粒の大きな陰核と肉の入り口を丹念に舌でほじり続ける。舐めれば舐めるほどに、綺麗に舌で清めれば清めるほどに美女の神聖な肉穴からは濃い白蜜が溢れ出てくる。

「く、くうう……」

ポーラは少年のペニスをそれが命綱であるかのように両手で固く握りしめる。豊かな肉体を持つ美女の眉はみつともなく八の字に寄り、眉間には哀しい皺が女の業として刻まれている。南海の熱い日差しに照りつけられ、下半身を剥き出しにした美女の額には汗が玉のように光る。少年はポーラにペニスを預けたままゆっくりと叔母の唇に自らの唇を押しつける。

舌が絡み合い、少年が放った精液とマレーネの膣蜜、そして唾液が混ざり合う。うっと

りと目を潤ませたポーラは砂の上に両足の爪先だけで踏ん張り、腰をみっともなくかくつかくつと痺れさせている。女はすでに自分の足で身体を支えることが難しくなっているのだ。少年はそこでポーラの身体を支えながらゆつくりと、熟れて熱くなった美女を砂の上に横たえる。ポーラは解剖台のカエルのように膝を破廉恥にも左右に広げたまま全身の筋肉を弛緩させ、荒い息をついている。

「はあ、はあ、はあ……」

美女の下半身では、リディアがフィオのほうを見て嬉しそうに笑っている。美少女は、
——これを見て、これを。

と、フィオにポーラの局所を指で限界まで広げて中を見せつける。少女の素晴らしい舌のほじりによつてポーラの股間からは特濃の牝蜜がじつとりと溢れている。少年はリディアに笑って答えると、若く美しい叔母の上に自らの肉体を重ねた。ポーラの優しい抱擁にフィオの下半身はすでに硬さと張りを取り戻している。そして、フィオはポーラの肉体を遊び尽くすことに決めた。ペニスの先端がポーラの肉壺にびたりとあてがわれる。リディアが指でポーラの割れ目を左右にぐいっと広げ、女の白に濡れた真の入り口がだらしなく口を半開きになっている様子が露になった。

「ポーラさん、行くよ……」

愛し抜いた若い甥に耳元で甘く囁かれ、ポーラは顔を激しく歪めて鳴いた。

「早く、早く挿して、挿して……」

ポーラはたまらないといった具合に、恥知らずにも両足を自らM字に広げて局部を牡のほうへ押しつけるようなしぐさをした。少年は慌てず、じらすようにペニスの先端で美しいポーラの熟れた割れ目のごく浅いところをかき回すようにする。

ふに……ふに……

ポーラの割れ目の中心、リディアが懸命に広げた中心部の上をペニスの先端が意地悪く行きつ戻りつ踊っている。ポーラは生殺しに耐えかねてまなじりから涙を溢れさせ、唇を歪めて泣き叫んだ。

「じ、じらさないで、もう限界、限界なのよーっ！」

ポーラは気が違ったようになって腰を上下に震わせている。

「が、我慢が我慢ができなっ……」

美女の哀しい絶叫が不意に途絶え、代わりに、濡れた唇から甘えるような、

「ぐうん……」

という牝犬のため息が漏れた。少年のペニスがポーラの膣に侵入を開始したのだ。膣への栓はそのままだちにポーラの喉の栓ともなった。フィオは叔母の膝を上から両手で押さえつけてぼうぼうに荒れ果てた、熟れた牝の局所を欲望でえぐっていく。亀頭部が美女の割れ目の奥底に綺麗に畳まれた筋肉の穴にすぼっとはまり、さらに奥へ奥へと突き進ん

でいく。割れ目の展開という重要な任務を終えたりディアは少年の貫通の邪魔にならないように今度は、ポーラの着ている麻の上着の中に手を入れ、これをまくり上げた。豊かな二つの大ぶりのバストに下着の類は巻かれておらず、そのために少年はすぐに叔母の乳房を目で楽しむことができた。素晴らしい二つの膨らみ。多くの男たちが夢に見、蹂躪することを望んだ左右の山脈をフィオは今や独り占めにしていた。そして少年は自分もぎ取った権利を決して他人には渡さないという強固な意志を持っていた。

「ああ、僕のものだ……」

少年は呟いた。くすんだ色をした幅の広いポーラの乳輪。少年には期待のようなものが微かにあったのだ。マレーネの身体に起こった奇跡。少年はその奇跡が叔母の乳房にも起こるのではないかと。そしてその期待はさらに高まる。ポーラの乳房、少年が掌で遊ぶには骨が折れる立派な膨らみは、一見して確かに張りが認められたのだ。何かが女の乳房の下にたっぷりと詰まり、若い牡に吸われるのを今か今かと待ち受けている。少年はそこでおそろおそろ美しい叔母の乳房に手をかけた。そしてゆっくりと慈しむように二つの乳房を揉みしだいた。神聖な奇跡が起こるように……。

「あ……」

リディアが小さく呟き、フィオのほうを見上げた。ポーラの乳首の先端から、白い液体がじわわつとにじみ出してきた！ 少年はたまらなくなり、下半身をつなげたままポーラ

の乳房に舌を這わせる。

「あ、あ、あーっ！」

ポーラは初乳を絞られる鮮烈な感覚に耐えかねて絶叫した。少年は無慈悲にポーラの乳房を激しく揉み、唇で乳首を締め上げて膨らみの中にたっぷり溜まっている乳液を吸い続ける。

ちう、ちう、ちう……。

フィオの口の中に芳しい滴が広がり、少年はまるで赤子のように夢中で自分のために供せられたミルクを吸い続ける。ただ吸い、奪うだけではない。少年は腰を巧みに振ってポーラのことを追いつめていく。

かくかくかく……。

マレーネにそうしたように、少年はポーラの肉壺をこじ開け、内側から上手に突き続ける。ただ。少年はポーラがマレーネ以上に膣の内側前面、尿道の裏のスポットが練れていることを知っていた。そこでフィオはポーラの膣内に潜む筋肉の集まった局部になるべくペニスの返しの部分が密着し、擦れるようにし丁寧な腰を動かす。

「ポーラさん……」

リディアも奇跡に目を輝かせている。母体の神秘、女だけが起こしうる奇跡。少女は悪戯をするようにポーラのもう一方の乳房、母乳でパンパンに張った乳房の先端をくわえて

ちゅうちゅうと吸った。

股間への念の入った突きに加えて、左右の乳首への容赦のない唇の刺激。ポーラは喉を詰まらせて、顔を真っ赤にしたまま後頭部を砂の上に何度も擦りつける。無意識のその動きによってポーラの身体がずりずりと頭のほうへ這い上がっていく。だが、少年は若く肉感的な叔母を逃すということは考えていない。フィオはポーラの腰の後ろに右手を潜り込ませ、カマキリが捕らえた蝶を鎌でからめ捕るように押さえつけると、女のミルクタンクをすべて飲み干す勢いでつんと硬く突っ立ったポーラの乳首を吸い、同時に、膣内をえぐる動作を激しくする。

「あ、あがああつ、あつ、あつ、あーっ！」

ポーラは唇を壮絶に曲げ、眉を寄せて意味不明の牝の叫びを青空に響かせた。少年のペニスが無慈悲に女の性感ポイントを突き、擦り、ほじり続ける。ポーラのアワビは破廉恥にも少年のペニスをがっぷりとくわえ込み、これを逃さないように、不細工な肉のびらびらがフィオの動きに合わせてあられもなく伸び縮みを繰り返す。

じゅっ、じゅっ、じゅぽっ、じゅぽっ……。

耳に心地よい湿った肉の演奏がポーラの膣とフィオのペニスによって奏でられ、そして快感に身悶えしたポーラが哀しくも切ない歌声を響かせる。

「あうう、あうっ、そこだめ、そこ擦らないでっ！　すぐに、すぐにいってしま、あわわ

っ……」

ポーラの悲鳴の終わりは意味をなしていない。一方責め手たちはそんなポーラをさらにぎりぎりとして締め上げていく。少年はペニスに若干角度をつけてポーラのGスポットを徹底的に、かつ力を入れて擦り始める。

かくかくかく……。

少年の腰の動きが激しく強いものとなる。乳首責めもより強力にねっとりとしたものになった。

ちうう、ちう……。

フィオは右手で叔母の乳房をぐにゅぐにゅと一心に揉んで、搾りたての生乳を飲み干していく。リディアも両手を使ってポーラの大ぶりのバストを揉んで芳しい蜜を吸い続ける。そしてポーラはただそれらの濃密で一方的な責め苦を受け入れ、園を食いしばり、白い砂を両手の爪で引っかいて耐えるのみである。

「ああっ、ああっ！ 気持ちいいっ、気持ちいいっ、フィオ、お願い、吸って、吸って吸って……ああっ！」

乳房から下をほとんど剥き出しにした女神は髪を白い砂の上に押しつけ泣き喚く。快感に身を固くしたポーラの裸足の爪先が少しづつ白い砂浜に食い込んでいくが、責められているポーラも責めているフィオも補助を試みるリディアもまったくそのようなことを気に

しない。そして。ついに稲妻の瞬間がポーラに訪れた。義理のとはいえ年下の甥にいいように翻弄され辱められ膾炙の敏感な場所をえぐられ続けたポーラにはもう一瞬もその場にとどまっていることなどできなかつたのだ。

「あつ、だめ、だめだつたらつ、まだ、まだ……」

まだいきたくない。終わりにしてしまいたくない。ポーラは抵抗し、その抵抗の表れであろう、肉感的な美女のタールで汚れた長い指がむなしく砂浜の白い砂をかきむしつた。だが、そうやっていられるのも僅かであった。フィオはポーラを天上に上手に導いていく。まるで風船にポンプで空気をどしどし送り込むように、美女の膾炙内にペニスを挿し込み、引き抜き、激しく腰を振って悦びの風でポーラの子宮内を膨らませる。パールホワイトの美しいポーラの本気汁が硬い陰毛の森にくつきりとした白い運河となつて垂れ流れ、熱く柔らかい筋肉の中心で少年の肉鉗が激しく踊り続ける。

「く、くはーっ！」

ポーラの口から悲鳴が漏れた。それは素潜りをしていた潜水夫が海面に出てきた時の一呼吸に似ていたかもしれない。女は長く暗い禁欲のトンネルからようやく脱出し、そして悦びに満ちた天の花園へと辿り着いたのだ。

「いっ、いくーっ」

ポーラは白目を剥いて唇をわなわなと震わせた。聖なる肉炉内に光がまばゆく輝いた瞬

間であつた。そして、その瞬間に少年は自らの爆発のピークを見事に重ね合わせる。

「うっ、出る……」

ぶびゅっぶびゅっ……。

勢いのよい白い奔流がポーラの膣内にぶちまけられる。服従の媚薬によって肉体を改造されてしまったポーラにとつては、子宮を鷲掴みにされて揺さぶられるような感覚があつた。快感という言葉では陳腐になり、絶頂というのでは足りぬあまりにも衝撃的で強烈な一撃。美女は涎を垂らし、白目を剥いて、横隔膜をびくびくつと振動させる。女の肌の下では白い稲妻が出口を求めて放電し、跳ね回り、ポーラの肉体を焼き尽くす。やがて、汗まみれになり、左右の乳首を白い母乳で、そして股間を女が本気であることを示す真珠色をしたエキスで汚した美女の顔ががくりと力なく砂の上に崩れた。

「んふー、んふー、んふー」

ポーラは小鼻を膨らませて熱い息を吐いている。少年はそこでペニスを女の膣内から引き抜いた。愛液と精液が年輪のようにして絡みついた肉の衝角が抜けてしまうと、ポーラの膣からも溜まりに溜まっていた恥知らずな女の業が白い固まりとなつてとぽぽつと噴出してくる。白い固まりはポーラの手入れを許されない陰毛の上をねとつと絡みつくように滑り落ちていった。ポーラは左右の足の平を重ね合わせ、膝を曲げて、両足でちょうど菱形を作るような姿勢のまま砂の上に果ててしまった。

「もう、もう駄目……」

リディアはうつぶせに崩れ落ちる。股を広げたまま尻を突き上げ、顎と両膝で身体を支える。少女のだんだん練れてきた二つの穴には蛇が頭を突っ込みずぼずぼと傍若無人に暴れている。

「んぐ、んぐ……」

もっとも多くの蛇を引きつけ、責め立てられているポーラがうめく。女の唇には蛇が入り続けている。乳房と膣、肛門と四匹の蛇にたかられたマレーネも顔を凄絶に歪め、快感と戦っている。

「あぁーっ、あぁーっ！」

リディアは快感に対する条件反射であろう、顔をうっとりときかせて二匹の蛇に挿し貫かれた下半身をはしたなく自ら振っている。

三人の女たちは夫を取り戻すという決意とは裏腹に、白昼堂々感じるポイントをえぐられ、こねくり回されて悶絶している。そしてそのような我慢の利かないあさましい女たちを見たアイシヤドウの美しい魔法使いは満足そうに、自分も同じ破廉恥な蛇遊びを楽しんでいる。

「あぁっ、素晴らしいわっ、なんて素晴らしい逸材……」

初めての蛇での遊戯で、三人の女たちはこれほどまでに興奮し、悦び、悶絶している。

宴を催したホステスとしては無上の喜びといったところであろう。

「ああーっ、あーっ！」

シルビアも二穴責めに耐えかねて、ついにリディアのすぐ隣に競い合うようにして膝をついた。素晴らしい屈辱感がシルビアの子宮を急速に満たしていく。長い髪を蔓で結んだ魔法使いは祈りを捧げるように額ずき、無防備な陰部を恥ずかしげもなく突き上げる。剥き出しの尻の割れ目には黄色と黒の縞模様の蛇が見事に突き刺さり、ぐちよぐちよとうごめいている。

「あつ、あつ、あはーっ！」

シルビアはこらえられずに鳴き叫んだ。快感が快感を呼び、女の中で神聖な反応が起こり始める。

四人の女たちが四つのアワビと四つの菊花を同時に蛇に貫かれ、ほじられる。暗い愉悅に女たちは敵も味方もなく若い肢体を震わせ、喘ぎ、叫ぶ。南海の島、木漏れ日の中、女たちによる荘厳な儀式が続けられる。

「ああーっ、フィオっ、助けてフィオーっ！」

リディアが苦しそうに腰を回転させて叫ぶ。美少女のアワビは甘くまるやかな刺激に単純に反応し、透明な汁をとろとろっと垂れ流している。蛇は枯れることのない肉井戸に頭を突っ込み、汁をすすり、さらに牝が美味しい蜜をひり出すように激しく前後への運動を続

ける。

ぬちよつくちよつ……。

湿り、柔らかいリディアの二枚貝の奥、普段はぴつたりと閉じられた秘密の扉の奥で蛇は踊り続ける。

「んぶー、んぶー……」

リディアの頭の上では、ポーラが左右の頬に窪みを作り、鼻の下を伸ばして熱い息を漏らしている。もはや逃げるなどできない。それが分かった今、ポーラにできることは快感を楽しむことだけであった。

——フィオとこの蛇責めを遊ぶことができたなら、気持ちいいに違いない……。

ポーラはその場にはいない甥っ子の顔を思い浮かべて、必死に屈辱を耐えている。

くちゅううくちゅうう……。

ポーラの乳房の先端では、蛇が我が物顔でミルクをすすっている。乳首から噴出する甘いミルクだけではない。いやらしい蛇は、ポーラが局所から凶らずも漏らしてしまった白っぽい本気汁までも味わっている。

「んぶー、んぶー」

ポーラは爪先で土をかきむしり、小鼻を広げて蛇の無慈悲な責めと戦う。もっとも、その戦いにポーラが勝利できる可能性は万に一つもなかった。

「ああっ、大事などころをそんなに突かないで、突かないでええ……」

マレーネは全身の筋肉を硬くして哀願している。美女の二つの敏感な肉穴では鱗をもった細長い生き物がすばしこく立ち回り、前後へのむごい動きを飽くことなく続けている。

「く、くううっ、くーっ！」

フィオの三人の妻たちの陰部、少年が毎日こつこつと大事に肉の彫刻刀で彫り上げた芸術品とも呼ぶべき三つのアワビ。激しく暴れる蛇たちに感応した三つの果実はこらえきれずに透明な潤滑液をだらだらとだらしなく垂れ流す。

「くふうっ、ふううーっ」

リディアが怒った猫のような鳴き声を上げ、ポーラも道の上に腰骨を左右に擦りつけて踊るように鼻を鳴らす。

「んふー！ んふー！ んふー！」

マレーネも仲間と淫声を競い合うように白い肌を小刻みに震わせ、脅えた犬のように歯を剥き出しにしたまま泣き叫ぶ。半開きになった美女の赤い唇からは涎が溢れ、流れた唾液は美女の黒髪の上に落ちてつややかに光り輝く。

木漏れ日の中で思い思いの格好で局所を、アナルを掘削され苦しみ悶える女たち。女たちを勝負に誘った張本人である魔法使いも懊悩するという点ではまったく変わりがない。

——快樂は万人に。

蛇たちは敵味方を区別しないということ、神のごとく公正であり公平であった。

「んああつ、んあーっ！」

夫への忠節からじつと快感に耐える三人の客人に比べシルビアの反応はもつと純度が高く、汚れのようなものがまったくなかった。低劣な生き物に神聖なアワビを辱められる背徳の喜びに純粹に悶え、これを楽しんでゐる。

「気持ちいいつ、うああつ」

隣で快樂の神に祈りを捧げているリディアを煽り、励ますようにシルビアは恥ずかしい腰振りダンスを踊る。かま首をもたげた蛇はシルビアの膺の中を、肛門の中をずぶりずぶりと蜜音を響かせてほじり続けている。

ぬちよつぬちよつ……。

くちゆくちゆく……。

敵も味方もない。女たちは快樂の前に等しく無力であった。四つの二枚貝がえぐられ、四つの菊座が汚される。ねつとりとした白蜜が垂れ流れ、そして女たちは苦悶の皺を額に刻む一方で、口元には満悦の笑みを浮かべる。

南洋の背の低い木々の厚ぼったい緑の葉の隙間からはまるで神の恩寵のように日の光が筋となって女たちの身体に降り注ぎ、みずみずしい女肉の上に光の斑となって輝く。汗まみれになった牝獣たちの切ない鳴き声が甘く甘くあたりに響き渡る。腰を振って自ら快樂

をむさぼるシルビア。多くの蛇を一身に引き受け、乳房、二つの穴、唇と文字通り快感のめった打ちにあうポーラ。涎を垂らし夫への貞節を過酷な二穴責めをもらいながらも何とか守り抜こうと奮闘するマレーネ。石の道の上に額を押しつけ、厚さにかける少年のような尻をはしたなくもぐいっと天に突き出し、襲いかかる快感に翻弄されるリディア。美しくもあさましい牝獣たちの敏感な割れ目の中心、柔らかい膣の内側で、肛門の中心で蛇たちは猛威を振るう。ガルバの蜜吸い蛇たちの恐ろしいところはその動きが女の肉体を無視したのではないところにあった。蛇たちは女の蜜を飲むことを好んでおり、そのためには女体に苦痛を感じさせるわけにはいかないのだ。あくまで快感に悶え、自然に子宮内の蜜を溢れさせる。ポーラたちが苦しんでいるのは蛇たちに大事な部分をほじられることが肉体的に苦しみではないからであつた。

ぬちよぬちよ……。

くちゆくちゆ……。

蛇たちは冷血に、巧みに業の深い女たちを締め上げ、牝獣たちは怒りにも似た責め苦に
もがき、苦しみ、腰を振って耐え続ける。

「くうう……」

マレーネが菌を食いしばつてうめき、素っ裸のポーラは目を閉じ、顔を汗でてからせて唇と喉への陵辱を受け入れる。

「んふーんふー！」

リディアは蛇たちの丹念なほじり運動が壺にはまったらしく、小さく、小刻みに鳴き声を上げている。

「あ、あ、あ、それ、そこ、そこ……」

そこをどうしてほしいのだ？ 蛇たちの動きがまるでリディアを尋問するように速まり、そこで少女の意識が一瞬だけ飛んだ。

「うはああつ、はーっ！」

リディアの青い肢体は無慈悲なダブルファックによってそろそろ限界に近づいている。少女はうわごとのように悲痛な泣きを漏らす。

「フィオっ、助けてっ、助けてっ、お願いっ、いつてしまうっ、いきたくないのにいつてしまっそう……」

リディアの祈りに隣で同じように尻を突き出す格好で屈辱を受け入れるシルビアが優しく励ますように言った。

「いきなさいつ、いくのよ、ああうっ……ためらうことなく……。恐れることはないわ……」

魔法使いの美女は舌で上唇を舐め上げて語り続ける。アイシャドウの美女の尻の割れ目では二匹の蛇が絡み合うようにうねうねと踊り続け、快感のさざ波に本気で感じた魔法使



いの割れ目からはパールホワイトの粘汁が垂れ流れている。黒と黄色。襲のくすんだ肉色。蛇が収まった粘膜のサーモンピンク。そしてラブジュースのミルクホワイト。女の股間が鮮やかに彩られていく。そして、絵画のように鮮烈な女たちの下半身を際立たせるようにさらなる色を加えられる。緑色をした蝶であった。森の奥からエメラルドグリーンの羽根を持つ蝶が一匹、まるで女たちの匂いに惹かれるようにひらひらと現れたのだ。蝶は蛇に貫かれる快感を愉しみ悶えている女たちの上を小さな羽根をぱたぱたと羽ばたかせて飛び続ける。やがて蝶はまるで木の葉が散るようにしてリディアが高く突き出した白い尻肉の上に舞い降りた。少女は自分の尻肉の上に蝶が止まったことに気がついていない。ただ、股間のまろやかな快感に子宮を疼かせるばかりである。縁が黒く中心部がエメラルドグリーンのきらびやかな羽根を持った蝶はリディアの尻の上をつつと歩いていくと、不意にゼンマイのように丸まった筒状の口を伸ばした。長く伸びた蝶の口の先端はリディアの土手回りに流れ出た透明なラブジュースへ——。緑色の蝶はやはり女たちの蜜臭に惹かれてやってきたのだ。

ちゆるる……。

緑の蝶が愛液をすすする音はもちろん誰の耳にも聞こえない。だが、蝶が蜜に満足していることだけは確かであった。リディアの尻に止まった最初の一匹を皮切りに、森の奥から次々に蝶が蜜を求めて現れる。十四匹、二十四匹、三十四匹……。緑色をした蝶はあるものはり

ディアの尻に止まり、またあるものは雄々しいほどに股を広げて局所を剥き出しにしたポーラの茂みの上に舞い降りる。マレーネの黒い茂みを好んで、そこに降りる蝶もいれば、シルビアのよく練れてこなれた渋い色をした割れ目に群がる蝶もいる。

ばたばた……。

全部で四十から五十の蝶が女の下半身に群がり、一斉に蜜を吸い始める。股間を極彩色に飾られた女たちはいよいよ激しく蜜を嘔き出し、悶絶する。そして、とうとう限界がやってきた。

「あ、あ、あーっ」

一番最初に陥落したのはリディアであった。尻の上を緑色の羽根で飾った少女の背中が不意にぴーんと反り返る。

「いっ、いく、いくううっ」

紅潮したりディアの顔にうっとりとした色が浮かぶ。そのまま数瞬。フィオのペニスによる激的な快感の中毒者となっていたリディアにとつては物足りないものであったが、それでも物足りなさがしこりになって子宮に滞るような後味の悪い頂点ではない。おそらくその場にフィオがいて、彼の指示によってこの刺激的な遊びが行われたのであれば、その快感はもっと素晴らしいものとなったのではないか。

——今度はフィオとこの蛇責めを愉しみたい……。

リディアはぼんやりとそのようなことを思いながら、その場にゆっくりと崩れ落ちていく。慌てた蝶がぱつとリディアの尻肉の上から飛び立った。緑色をした煙幕。下半身を剥き出しにしたリディアは両足をがに股に広げて、その場にうつぶせになって果てる。蛇は女が疲れ果て汁がもはや出ないことを察したのでろう、少女の可憐な割れ目の中から頭をずぼりと抜いた。栓を抜かれたリディアの膣から白っぽいまだ成熟していない若い本気汁がどぼつと溢れ出てくる。その匂いに惹かれて、肛門に頭を突き刺していた蛇も美味なごちそうにありつこうと菊座から頭を抜いて、ちろちろと蜜を舐め始める。逃げ出した緑の蝶も再びリディアの腿の上に舞い降り、おこぼれとなる白蜜を吸い始める。

「はあ、はあ……」

リディアは涎を垂らし、泥まみれになった額を気にすることなく、淀んだ視線を森の奥へと向けている。少女の焦点の定まらない左右の瞳は何も見えておらず、ただ股間に訪れた奇跡の余韻を愉しんでいる。

見事に絶頂に辿り着いたリディアに続き、ポーラの熟れた肉体にも限界が訪れる。

「んんっ、んーっ！」

ポーラの左右の乳房が、そこに絡みついた蛇が身体を揺することで、ぶりぶりとなわみ、歪む。乳首からは芳醇な母乳が尽きることなく溢れ、蛇の口と黒ずんだ幅広の乳輪の間からじわじわとにじみ出す。美女は爪先までぴーんと伸ばしきった両足を、二つの穴へのえ

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>